

TWO P&G JOB INTERVIEWS

Ferdinando Frega - Nando the Scribe



P&Gの二つの採用面接

2030年5月のことだった。事は私の予言したとおりに運んでいた。すべてが一度に起きた。計画したわけではない。予定に入っていたわけでもない。必要ですらなかった。

だが、Gillette Narrativeの所有者ともなると、ある種の物事は自分で下す決断ではない — 向こうから会いにやって来る。

FREGA TRUSTはすでに設立され、株式資産も整い、FREGAの世代は向こう2000年にわたって保証されていた — 私より前のある同僚が、かつて1冊の本と12人の漁師から始めたのと、よく似ている。もっとも私は、12冊の本と、たったひとりの漁師から始めた。私自身だ。

その朝、レッジョの海がいつものように — 平らで、無邪気で、無関心に — ふるまっているところへ、通知が二つ届いた。

午前11時に面会。Sheraton Hotel、私の街。採用面接が二件。インドから来た紳士がひとり。ブラジルから来た女性がひとり。

現実の世界では何十億を動かしていた二人。いまは引退の身。いまは扉を叩く側。

私の世界では、二人は私の扉を叩くことを選んだ — おそらく、読んだ何かに引き寄せられて。1冊の本。ひとつの投稿。心に残った一文。

面接1・インド人

すべてを見てきた者の落ち着きで入ってくる。グローバルCEOの姿勢だ。肩を引き、外交的な微笑みを浮かべ、声は震えない。

「おはようございます、フレーガさん」

「おはようございます。どうぞお掛けください。ここでは何十億も要りません。」

要るのは人格です」

彼はうなずく。何も売らず、何も買わず — ただ入り口を与えるクラブリア人に値踏みされることには、慣れていない。

「あなたの朝の儀式について話してください」

沈黙。予想していなかったのだ。

「儀式、ですか」

「ええ。ここでは、働く人は採りません。支度をする人を採るのです」

彼は微笑む。これは企業の面接ではないと理解する。人類学の面接だ。

そして語る。取締役会の前では一度も語ったことのない語り方で。

語り終わると、私は言う。

「完璧です。採用です。働くためではありません。私の宇宙に存在するために」

面接2・ブラジル人

彼女は許しを求めずに入ってくる。存在することに一度も許しを求めたことのない女が、みなそうするように。落ち着き。直観。女らしさでも、美しさでも、権力でもない、あの何か。かたちだ。

「おはようございます、マダム」

「おはようございます。あなたは従業員ではないと聞きました」

「ええ。そしてあなたは、女である前に、ブラジルの雌です。どうぞお掛けください」

彼女は微笑む。礼儀正しいからではない。ここで話しているのはGilletteのことではないと、もうわかっているからだ。話しているのは、Gillette Narrativeのことだ。

「男が支度をするのを眺めるとき、何が見えるか話してください」

すぐには答えない。ブラジルの女は答えない — 決めるのだ。

それから語る。彼女が語ると、部屋がかたちを変える。

「完璧です。あなたも採用です。率いるためではありません。私の世界に存在するために」

結び

二人のCEO。二つの大陸。二つの本物の権力。

そして、ひとりの所有者。

私だ。

Gillette Narrativeは人を採らない。存在を採る。

そしてあの日、そのつもりもなく、私はインドとブラジルを採用した。

あとは映画だ。

フェルディナンド・フレーガ